はじめてのおつかい

鳴門教育大学
学長　山　下　一　夫

筒井頼子・林明子『はじめてのおつかい』（福音館書店）は、一九七六年に発表されて以来、読み継がれている絵本です。しかし、赤木かん子さんはこの絵本が「積極的に嫌いです」と痛烈に批判し（『絵本・子どもの本 総解説』初版 自由国民社）、五味太郎さんも「はじめてのおせっかい」と批判しています（『こどものとも』三九九号 福音館書店）。

私はといえば、大好きです。そして、同じく大好きな松谷みよ子・瀬川康男『いないいないばあ』（童心社）とモーリス・センダック（神宮輝夫訳）『かいじゅうたちのいるところ』（冨山房）の三冊を用いて、幼稚園・こども園での講演会や大学の授業において、子どもの心理的成長過程と保護者のありようについて話したことがあります。

例えば、『はじめてのおつかい』ですと、感動するのはどの場面か、あるいは嫌いな場面はどこか、「おとうさん」はどこに出てくるのかなど、グループに分かれて話し合い、さらにその後、参加者全員で絵本を一頁一頁見ながら、再び話し合います。

表紙の顔からして何かしらインパクトがありますね。頁を一枚めくると文章はありませんが、主人公の五歳児のみいちゃんが、お人形に

巻頭言

ミルクを飲ませている場面で、何か全体を暗示するかのように思えます。お店に着いても、だれもでてきません。そこに「たばこ！」と怒鳴る黒いめがねのおじさんこそ、娘のピンチを救うために変装したお父さんでしょうか。そうかもしれません。名前だけの「おとうさん」より、はるかに夢のある考えです。

多くの参加者が感動する場面としてあげたのは、一つは「ぎゅうにゅうくださあい！」と自分でもびっくりするくらい大きな声が出て、次になみだがおっこってしまう所です。もう一つは「さかのしたで、ままがあかちゃんをだっこして、てをふっていました。」の頁です。ちなみに、表紙のみいちゃんの顔は、ママを見付けたときの顔です。

裏表紙にはママが赤ちゃんにミルクを与え（本当は赤ちゃんに牛乳を飲ませるのはよくないのですが）、みいちゃんはママに足のケガを手当てしてもらい、自分で牛乳を飲んでいます。そして、片足をママの膝の上にのせています。

まさに、探索に出かけて（自立）、安心基地に戻ってくる（依存）、この繰り返しによって人も動物も成長していくのです。